

【小羊保護者】

「おじちゃん先生ありがとう」

園行事の駐車場当番、何度かおじちゃんと一緒になって、立ち話をした事があった。

「こつち（関東）の寒さはどうも慣れない」とか「ワシの小さいころはなあ、オヤツと言ったら山で採った果物でなあ」とか、おじちゃんの声となまりで聞くと絵本を読んでもらっている様で、毎回一緒になるのを楽しみにしていた。

最後の入院「明日何が有ってもおかしくない」と聞いて、病室まで教えてもらったのに顔を見に行かなかった。おじちゃんの悲しい姿を見たくなかったし、おじちゃんも見せたくないだろうな、と思ったからだ。

おじちゃんが亡くなった後、保護者会の中から「親子遠足で何か手伝いたい」や「先生が大変そうなので、畑の草取りを手伝ったらどうか？」等、園に協力的な声が増えた。そういった一つ一つの気持ちや声の中に、おじちゃんがまだ生きているのだと感じた。これからも心の中のおじちゃんが消えないように努めていきたい。

そんなおじちゃんが絵本になった。絵本の中にはいつも見慣れたおじちゃんがあった。園児とおじちゃんの交流を通して、生と死のつむぐ物語を誰にでも感じられる様に完成させて下さった村尾先生と、おじちゃんの人柄が浮き出る、やさしい絵を描いて下さった山本先生には心から感謝します。そして、おじちゃんが過ごした小羊チャイルドセンターと市川先生には感謝以上の気持ちです。

最後に、おじちゃんには私にこんな話を残してくれました。

「今の子どもはかわいそう、小さな時から保育園に預けられて、大きくなればTVゲームばかりでしょ……ワシの小さい頃はなあ……」この言葉に自分の親としての至らない部分を痛感し、おじちゃんの心の豊かさを思いました。おじちゃん先生ありがとう、背の低いコスモスが園にそよいでますヨ。

大熊 武文

【絵本を頂いて】

「おじちゃんせんせい だいたいだいすき」を幾度となく開き読み、かえしました。涙しました。心を洗われました。自分のあゆみを振り返り、心を洗われたのです。それが即、涙となったのです。おじちゃんせんせいに只々敬服し、感謝の意を表します。有難うございました。

心の芯までポカポカとぬくもりました。

なつかしいと言うか？ あったかいと言うか？ 言葉がみつからないけど何とも言えない。うれしかった。泣けてしかたなかった。

絵から伝わるこの気持ち、表現出来ないけれど、感動で一杯。今度は〇〇先生ね。

最近の事件、胸が悪く不愉快な思いもある一方でこんなお話もあり、人間は限りなく残酷にもなれるし、際限なく優しくもなれるのですね。

人のあたたかみを素直に感じられる内容ですし、先生のお働きが神に祝福され導かれてることを覚えます。

やさしい涙がにじむような気持ちになりました。

実話に基づくものとして直接に関わった園児くんにとっては、おじちゃんとのことは貴重な幼児体験として生涯を支えてくれる宝ものになると思います。どう子供に接していいかわからず困惑している多くの母親にとって、おじちゃんの接し方は一つの光でしたね。市川先生の保育方針の実現だね。